

2013. 8 月

昨年 12 月 5 日、文部科学省は 10 年ぶりに、通常の学級で「発達障害」の可能性のある児童生徒の実態調査の結果を公表した。結果的に在籍率(6.5%)が大きく変わることにはなかった。

本校においても、この在籍率から考えると30数名の子どもが在籍することになる。実数はもっと多くなると思うが、以下のような姿を本校の生活の中で見る。

・授業中の姿勢が崩れやすい子 ・音読が苦手な子 ・板書を書き写すのに時間がかかる子 ・文字が枠から大きくはみ出る子 ・注意してもおしゃべりをする子 ・話が最後まで聞けない子 ・トラブルが多い子 ・友だちを興奮させるような子 ・いらいらしているような子 ・わがままとしか思えない言動の子 ・表情があまりない子

このような実態に対して、担任はいろいろな観点から対応をしているが、苦慮もしている。毎日のように何度も注意をされるのに、なかなか授業中の私語をやめないAちゃん。先生の話よりクラスメイトの些細な発言に敏感に反応し、大きな声を出すので学級の中でさらに目立ってくる。再三の注意のため、周りの子どもは我慢の限界からかAちゃんの言動に諦めたり、また学級全体に迷惑をかけるうるさい子と考えたりしているのでないかと心配する。

しかし、Aちゃんは、授業中ずっとおしゃべりをしているわけではなく、興味があるもの(例えば、昆虫)には高い関心を示し、集中する場合がある。よそを見て、質問を聞いていないようであっても的確に答えたり、臆することなく発言をしたりして、他を驚かせることがある。個人的に話すといろいろなことを話し、授業中の態度との差を感じさせる。

そこで、マイナスの姿ばかりを見ていくのではなく、ここからよさを読み解き、応援・支援をしていく子どもの見方の転換をしていきたい。このAちゃんは、「話す力」はあるが、止められないという切り替えが難しいと分析できる。黙ることができないことを顕在化したり、黙らせることに終始したりする指導は、多分効果は薄い。周囲のクラスメイトをよく見ていることを認めながらも声の大きさを抑えることを伝え、少しでも黙って真剣に取り組んでいる姿があれば、意識して「心の中だけの声で頑張っているね。」と声をかけたい。

待ったなしで眼前の子どもの言動をどのように見取り、読み解き、そしてどのような支援が有効か真剣に考えていきたい。その構えとして、次の2点を重視したい。

1 子どものつまずきの背景を読み取り、原因を探る

子どもの問題として目に映る言動には、必ず目に見えないつまずきが隠れていると言われる。暴力的な行動が多い子どもは、もしかしたら感情をうまく表現できない結果かもしれない。また、自分の読み書きの遅れを隠すために、授業中の離席や悪ふざけをしているのかもしれない。

2 言動をできる限り予想して、事実との違いを考える

子どもを背景から原因を探るためには、状態・方法・経過の仮設を立てたい。状態の仮設により、先入観で見ず、見えにくいつまずきに気付くことができる。また、方法の仮設は、限定的な方法からよりよい方法を考案できる可能性が高まる。さらに経過の仮設は、効果を早く求める気持ちから、長い目で子どもの成長を見守る根気が湧く。



必然性をもたせた班内の情報交流
(2013 年 3 年社会)
写真と文は関係ありません。

状態の仮設	・なぜ、～してしまうのだろうか？ ・なぜ、～できないのだろうか？
方法の仮設	・改善できるとすれば、～方法はどうだろうか？ ・～な方法だと、悪化させてしまうかもしれない。
経過の仮設	・～したら、次には～ができるだろう。 ・～しなければ(放置すれば)、～なってしまうだろう。

「発達のつまずきから読み解く支援アプローチ」
川上康則著 学苑社 P58引用